

学習指導の充実に向けた組織的な 評価活動の取組

～評価データの分析にICTを活用して～

二宮町立一色小学校

〒259-0133
神奈川県中郡二宮町百合が丘2-7

I はじめに

本校では全教職員に1台ずつ支給されたPCを活用して校務データの共有化、校内メールでの資料提供、職員会議資料のペーパーレス化、児童の写真や個人情報をPC画面で共有しながらの情報交換等、ICT環境を活用することで充実した情報交換、迅速な情報提供、教育活動の活性化を図ってきた。

指導に関しては、指導資料や指導計画を共有し、校務サーバを活用して通知表と一覧表とを関連づけ転記ミスをなくして評価の信頼性を高めてきた。さらに、通知表作成を電子化して所見等のチェックを充実させ、指導内容や児童一人一人の学習状況が児童、保護者に正しく伝わるようにした。こうした評価活動は教員間の綿密な情報交換に基づいて行われ、ひいては指導の充実につながっている。

そこで、校務支援システムを導入してICTの可能性をさらに高め、指導のねらいに沿った組織的な評価方法を確立し、児童一人一人の評価データを蓄積して効率的な評定化と6年間の継続的な指導への活用を研究していくこととした。評価データは保護と正確さが特に求められる重要な個人情報である。校務支援システムの活用によって評価の信頼性を確保するとともに指導の充実につなげていった。

II 研究の経過

1 校務支援システムの活用に関する教員研修の実施

校務支援システムの可能性を知り、円滑に活用できるよう研修を行った。

校務支援システム等のアプリケーションは、全体でその活用方法を共有し、足並みを揃えない限り単に「便利な道具を個人個人が使用する」ものになる。

本校の取り組みの特徴は、校務支援システムの導入を、これまで個々で行われていた評価活動を組織的なものに変える契機ととらえ、そこに向かって条件整備していったことである。

ICTの活用による校務の効率化が確実に指導の充実という付加価値につながることをめざしていった。



校務支援システム研修会

2 指導のねらいや到達目標に即した組織的な評価活動

評価研究会を行い、指導のねらいに沿った評価場面と評価資料を全員で検討し、足並みのそろった評価活動を行った。また、指導計画に評価規準を組み込み、評価結果を踏まえた指導改善が行えるようにした。



日常的に行われる
同学年の
教員同士の指
導と評価に関
する話し合い

本校は各学年2クラスずつという比較的小規模な学校である。学年内で必要な情報交換は職員室内で簡単に充実させることができるため、話し合いの時間設定は行わなかった。

校務支援システム導入後は、「この単元は、どこで、どのような子どもの姿を評価するのか」「それにはどのような指導が求められるのか」「発問は?」「教具は?」「評価の基準は?」といった会話が日常的に行われている。

3 評価データの蓄積と評定化

- ・児童一人一人の評価データフォルダを作成して観点別評価データの蓄積を充実させ、観点別評価の精度を上げるよう努めた。また、観点別評価をもとに指導を丁寧に振り返るとともに、児童一人一人の学びに即した指導につなげるようにした。

- ・教師間で評定にずれが生じることがないように評価規準を基にした評定化のプログラムを組み、評価の信頼性を高めていった。

- ・評価の精度を上げるとともに評価メモを作成し、評価の具体を蓄積して次年度以降、各教科、学年で活用できるよう共有フォルダに保存していった。この評価メモは校務支援システム内ではなく、別途作成して共有フォルダにファイルし、誰でも見ることができる。これは今後の評価活動を効率化するとともに、評価の透明性を高めることにもなっていた。

また、評価メモ作成の過程で指導内容の見直しや精選、基準をそろえるための話し合いが行われ、評価の精度の向上につながっている。

《評価メモ》

24年度評価メモ		1年		教科		図工
○学年で話し合ったときにメモしてください。						
○どのように評価したかを積み重ね、評価の在り方を検証したり次年度に送ったりして活用します。						
実施月	単元名	評価対象・評価物	観点	カッティングポイント・到達の具体的な姿		
				おおむね満足(B)	十分満足(A)	
9月	クッキーやさんになろう	作品・活動の様子	関心	・作品を作っている。	・丁寧(成形の仕方や色粘土の付け方など)に作品を作っている。	
24年度評価メモ		6年		教科		国語
○学年で話し合ったときにメモしてください。						
○どのように評価したかを積み重ね、評価の在り方を検証したり次年度に送ったりして活用します。						
実施月	単元名	評価対象・評価物	観点	カッティングポイント・到達の具体的な姿		
				おおむね満足(B)	十分満足(A)	
9月	たのしみは	作品	関心	五・七調のリズムで俳句・短歌を作成できた	季節や語感や響きを考えながら言葉を選んで五・七調のリズムで俳句・短歌を作成できた	
※各学年学期ごと、教科ごとに評価メモを作成。						

4 6年間の継続的な指導を視野に入れた評価データの活用

児童一人一人の評価データフォルダを校内で共有し、学級担任の引き継ぎ時等の活用を通して6年間の継続的な指導につなげていかれるようにした。

5 意識調査結果から見る校務支援システム導入の成果

校務の情報化によって評価活動や指導がどのように変容し充実したかを教員アンケートによって検証するとともに、校務支援システム開発者との情報交換を行って、学習指導要領の趣旨に沿ったシステムは単に「数値の合計」や「置き換え」ではなく、児童一人一人の単純には割り切れない学習成果を評定に確実に反映されることが求められていることを伝えていった。

意識調査からは、児童の学習状況を評価する際の教師の『感覚的な』みとりの正しさも浮かび上がっている。「学習指導要領の趣旨に照らした評価規準」が共通認識できたうえで児童一人一人の日々の成長や変化に合わせて柔軟にとらえる視点を失ってはならない。校務支援システムを活用して得た評価結果を手作業で最終調整したが、この作業は欠かせないことを確認していった。

① 指導の充実に資する評価活動であったか

《問：学年での話し合いは指導の充実につながったか》

大いにつながった	50%
まあまあつながった	38%
特につながらなかった	12%
全くつながらなかった	0%

自由記述

・単元の目標や児童の具体的な姿を話し合うことによって、授業の中で到達させなければならない姿や教科書のどこを丁寧に扱うのかなどを共通理解することができた。

・学年での評価の話し合いにより、授業が終わった後でねらいの見落としに気付いたこともあった。特に技能教科ではねらいをしっかりとって授業を組み立てたいと思っている。

・共通認識をもって指導にあたることで、大人が場面によって、複数または入れ替わり関わる場面でも子どもたちに迷わせるようなことが少なくなるように感じた。

・他教師の考え方を取り入れることができた。

・教科単元により時間数を増減したり、練習プリントを作成したりした。

・評価規準の明確化。

・体育のかけこのコースの作り方やおにあそびの種類などを増やせた。算数や国語で進め方を話し合ううちに教具の必要性が分かり、お互いに用意した。

・何をどう指導して、どう評価するか共通理解できた。

・算数の思考判断を何で評価するかということで、既習事項をもとに様々な方法で考えることができる三角形や平行四辺形の面積のところで評価しようと決め、Bの姿として自分なりに説明ができるところまでの力をつけさせたいといことを確認して授業に臨みことができた。

・同じ指導個所でも、先生方によって、アプローチの仕方が違うため、勉強になりました。

・どのように授業や評価をするのか、単元に入る前に話し合うことができたことがある。（話し合う時間がなかなか取れず全ての教科・単元で、とはいかないが。）

・細かく日常的に評価を積み重ねることで、子どもたちの小さな変化や成功また失敗や困ることなどを視点として持ちやすくなり、スモールステップの学習に移行しやすかった。

・指導方法の工夫の共有化。カッティングポイントの精選ができた。

・児童の到達具合を話し合い、それに関する手立てや工夫を共有でき、効果的な指導につながった。学習での子ども達の姿を話し合うことで、お互いのクラスの児童の児童理解にもつながった。

・学年で評価を合わせる話し合いから、流れで教材の研究もできた。

・ねらいをはっきり共通理解してから指導に望むようになった。

・体育など点数で表せない科目の場合、どの点を評価対象としどのように記録するのか、スズキ校務に入力した際はカッティングポイントをどうするのか、等を話し合った。話し合った後に授業を行ったため、見るべき視点がはっきりした。

・話し合ったことで、工夫ができた。

・ねらいに合わせた指導方法を教えていただいた。

児童の学習効果についての検証はできていないが、意識調査結果から判断すると、今後、取り組みが継続されるのに伴って、教師の指導技術は向上かつ一定レベルが保たれるであろう。結果的に指導効果も表れてくると期待できるので、今後、全国学力学習状況調査等も活用して、関連関係を見ていきたい。

② 評価活動は効率化されたか

《問：システム導入によって通知表の作成にかかる時間は短縮されたか？》

非常に短縮された	0%
まあまあ短縮された	50%
あまり短縮されない	12%
まったく短縮されない	6%
導入前より時間がかかった	13%

自由記述

・評価の判断に迷う時間が減ったように感じる。それよりも、何を評価するのか、そのためにどのような指導をするのか、といった内容についての話し合いが深まったように思う。
 ・ABCの集計をすぐにしてくれるのはとても助かります。
 ・評価の精度は学年の中で上がってきていると思う。すべて数値化されていることは分かりやすく合理的だと思う。ただ、数値にしにくい部分の評価（関心意欲、鑑賞領域など）を数値に表わすのはとても難しいことだと思う。
 ・学年で評価を合わせられる。
 ・評価について何をどのように評価していくのかということを具体的に話し合いをすることができてよかったです。

《問：出席簿の管理は効率的、かつ確実に変わったか》

非常に効率的になった	100%
非常に確実に変わった	100%

正確な出席簿の管理は朝の出席確認と、遅刻や早退の状況を学級担任が毎日確実に記録しておくことが大前提である。しかし、多忙な中でつい記録が後回しになったり、通知表作成時点では記憶が薄れていたりして曖昧になりがちである。

そこで、毎月1回出席簿確認の日を設定し、養護教諭が行っている毎朝の健康観察記録や保健室で把握している早退状況等を照らし合わせて出席簿の確認を行っている。確認日には、担任の把握している情報と養護教諭の持っている情報を合わせ、支援システム内の出欠席情報欄に記入している。

自由記述

・出席簿がより正確になった。
 ・出席簿のチェックができるようになり、ミスが少なくなったと思う。
 ・出席簿は改めてやりやすいと思いました。

通知表作成上、ミスが出やすく細かなチェックが求められる出欠席情報が確実になり、また正しく反映されるようになったことで、通知表の作成が効率化されたと言える。

《問：評価に関する話し合いは活発になったか》

大変活発になった	59%
まあまあ活発になった	29%
導入前と変わらない	12%
導入前より不活発であった	0%

《問：通知表機能を使って作成した指導要録作成機能は使いやすかったか》

自由記述

・指導要録まで一気に作成できるのは良かった。

③ 教師の意識の変容

○学習指導要領に即した指導と評価

指導と評価の一体化を目指した本研究では、指導のねらいの再確認が欠かせなかった。そのつど学習指導要領に立ち返り、求められる評価を探っていった。いわば、本筋に立ち返っての教育活動が展開されていった。

○協同して教育活動を進める姿勢

評価活動は単に「教科指導の結果を数値で表す作業」ではなく、児童一人一人の人格形成の課程をみとる作業であることを、本研究を通じてより強く認識した。そして、この作業は必然的に教員同士のコミュニケーションを活発にする。多忙な職務の中でも職員室では教員同士の言葉が行き交い、情報交換も充実している。全ての教師が同じ目線で子どもたちを見つめ、協同して育てていくという姿勢も強くなっている。

○ICTに対する教師の抵抗感

校務支援システム導入に際して、パソコン操作に不安を感じる教員がいたが、「とにかく使うこと、慣れること」を合言葉に不安を克服していった。年度末、「PCは苦手でしたがなんとか使えるようになりました」という言葉があった。ICTを活用することが当たり前になっている時代に児童に向き合う立場にいる教師がICTを敬遠することはこれからの教育活動にとって決してプラスにならないだろう。今年度の研究を通してICTの可能性と限界性を共通理解できたことの意義は大きい。

6 学習評価以外の機能の活用

購入した校務支援ソフトにはさまざまな機能が付随しており、校務の効率化に大いに役立った。

① 校内アンケート機能

アンケート調査は校務支援システム内にある「アンケート」機能を活用した。この機能は集計の手間が一切かからないため、行事等の振り返り時、教育活動以外での教職員の意見収集（例えば、駐車場のローテーションに関する意見収集）等にも活用され、校務の効率化につながっている。職員室前面のホワイトボードにはその都度「メールあり」「アンケートあり」等のICTに関するお知らせが貼られる。

本校では校務支援システムの活用と並行してICT環境の有効活用に努めている。

打合せ内容は紙ベースでなくPCの共有フォルダに入れ、週1回の打合せ日には全員がPCを開いて臨む。

職員会議や伝達も同様に共有フォルダや校内メールを活用している。



当初、教職員間のコミュニケーションが阻害されるのではないかと懸念したが、結果は紙ベースで行っていた頃より意見交換や発言が活発になっており、予想外の状況が生まれている。

② 児童の履歴機能

評価活動のうち、行動の記録をもとにした所見欄は、児童の履歴機能によって他教師のコメントも参考にすることができ、内容が充実するとともに作業効率が高まった。

また、児童指導全体会や支援教育全体会では、児童の顔写真付きの履歴機能を活用した。プロジェクターと個々のPCで顔写真と記述された情報を見ながら情報交換を深めている。この会議は児童の個人情報のうちでも特に取扱いに注意する必要がある内容を扱うが、校務支援システムは安全性がより高いため、活用意義が大きい。

③ 名簿機能

児童名簿を使用する校務は多い。校務支援システムが導入されるまでは個々に名簿を作成していた部分もあったが、導入後はシステム内の名簿をさまざまな分掌の中で活用している。校内全体の校務の効率化ととらえられる。

Ⅲ 研究の意義と今後の課題

本校の研究が推進されている最中にも、他市町で通知表の不備や誤記入が問題になっていた。そのうちの何件かは独自に作成したエクセルファイルの不具合や、計算範囲の選択ミスなど、校務支援システムであれば防ぐことのできるミスであった。

本研究を推進することになった直接的な背景も、他市における大規模な通知表の誤記入問題であった。児童の評価に関する正確な情報をとらえて適切に評価し、それを児童や家庭に伝えるとともに次の指導に活用する作業は、学校の重要な使命の一つである。

今年度は、校務支援システムを理解し、その機能を十二分に活用することを中心に研究を進めてきたが、次年度は児童の成長や学力向上に資する「指導と評価の一体化」の意義をさらに追究し、どの場面で校務支援システムを活用したらそれが効率的に進められるか、というICT活用の本来的な考え方に基づいて活用方法を整理していきたい。

また、意識調査では校務支援システムを活用するにあたって、「使いづらい」「果たして児童の姿を正しくとらえられるのか」という意見も出されている。全職員で足並みをそろえて行ってきた研究の中でのこうした意見は指導と評価の充実をより高めていく際に検証する価値の高い意見である。ICTの活用の際には、ICTの限界性も押さえたうえで「使われる」のではなく「使いこなす」意識と技能が求められる。